「特別の教科　道徳」における
ドラマと反転学習を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」

早稲田道徳教育研究会

１．テーマ設定の理由

「特別の教科　道徳」（以下、道徳科）は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」道徳教育の要として、小学校においては平成 30（2018）年４月から、中学校においては平成 31（2019）年４月から全面実施されている。平成 29（2017）年に告示された学習指導要領の総則で求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点に立つと、教員が求めている答えを児童生徒が探しに行く授業ではなく、答えが一つに定まらない道徳的課題に対して、児童生徒も教員もともに考え、探究する学習者主体の授業の実施が必要であるといえる。具体的な方法として、思考・判断・表現の過程の一つである「生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、…（略）…思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習」が挙げられる。また、教材に登場する人物の言動を実際に演技する体験的な学習は、道徳科の特質に応じた見方・考え方である「様々な事象を道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりのなかで広い視野から多面的・多角的にとらえ、自己の人間としての生き方について考えること」を踏まえた深い学びにつながる。以上を踏まえ、本実践では、生徒たちが道徳的諸価値の理解の基に、協働作業を通して、体験学習を創造する過程を授業に取り入れた。

２．実践の方法

本実践では、「創造的な体験活動」としてのドラマと反転学習を取り入れた道徳科の授業実践を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした。

①「ドラマ」を取り入れた授業を展開する

ドラマとは、教材に登場する人物の言動から心情を読み取り、その心情を声や体で表現する演技方法を自分たちで考え、実際に演じる協働的な体験学習である。即興劇とは違い、テレビドラマのワンシーンを製作するイメージだ。道徳科の学習では読み物教材を単に読み取る「間接体験」を基にした学習が多いが、ドラマは自分たちで演技をする「疑似体験」を通して、生徒の心中に当事者意識を生み、主体的に課題と向き合うことができる。それまでの過程では、演出等を話し合う対話的で創造的な活動の中で、生徒同士の学びが深まると期待される。また、お互いに観劇すると、同じ場面に対して、様々な捉え方や表現があることに気付き、道徳的価値について多面的・多角的に考える機会につながると考えた。これらを踏まえ、中心発問を投げかけることで、より深い議論へとつながることを期待した。

②「反転学習」を取り入れた指導計画を立てる

反転学習とは、従来教室の中でおこなわれていた授業学習と演習や課題など宿題として課される授業外学習とを入れ替えた教授学習の様式（cf. Lage, Platt & Treglia, 2000; 山内・大浦, 2014）である。本実践では、予習した内容の活用や探究を実施する反転学習により「主体的・対話的で深い学び」を実現できると考えた。具体的には、中心発問の時間を充分に確保し、その質を上げるために反転学習を実施する。ドラマを効果的に実施するためには、教材をしっかり読み、登場人物の言動や心情を考えるなどの入念な準備が必要であ

る。そこで反転学習を用いると、事前に生徒が主体的に考えたり、教え合ったりする機会や、授業内に中心発問について話し合う時間を確保できると考えた。また、生徒には、演技に対するルーブリック評価表を学習に対する指示と同時に提示することで、評価の共通理解を図り、学習活動や自己評価、相互評価の指針を示した。

3．実践した内容

本実践の教材『帰郷』は、文部科学省が作成し、平成24年5月に発行した『中学校道徳読み物資料集』に収録され、『私たちの道徳』にも収められている読み物教材である。東京で俳優をしている息子のもとに、田舎で一人暮らしている母の急病の知らせが届く。母を東京に連れていき面倒を見るという息子に対して、迷惑をかけたくないという母の思い、息子に代わって母の面倒を見ると提案する夫婦や母の店の常連たちを通して、息子は多くの人に支えられて生きていると気づき、感謝するという内容である。人間が多くの人々の支えられていることに気づき、感謝を忘れないことの大切さを考えることができる題材である。しかし、家族とともに生活している多くの中学生にとって、自分事として捉え、考えることが難しい内容である。

本実践では、ドラマを取り入れることで、教材の可能性をより引き出せると考えた。登場人物それぞれの考えを知った主人公が葛藤を抱える前後の場面を切り取り、その場面を演じさせた。それを観劇し、相互評価したのち、中心発問を投げかけた。

4．結果と考察

まず、生徒の振り返りを項目ごとに取り上げる。

・自己を見つめる

「人物の心情を考えて演じることは自分が思っていた以上に難しかったです。一つの話の中にも考え方がいろいろあり、おもしろかったです。」

・多面的・多角的な考え方

「いろいろな考えがあり、自分が思いつかなかったような考えや意見が多く、たくさんの視点からとらえられた。」

・人間としての生き方についての考え

「私は母を演じました。母の役を演じることで、私が母だったらどのようなことを思うかということがわかりました。」

・登場人物の心情の理解

「文章を読むだけでは、うまく感情が伝わらない事とかあるけれど、実際演じてみると、より、登場人物の心情が細かくわかれたような気がしました。」

・資料の理解

「台本の中に出て来ている人物の気持ちをとらえやすい物になっているなと思いました。そのシーンにいたるまでの流れが詳しく書いてあったので話がわかりやすかったです。」

上記のように、ドラマの前後で学びが深まった生徒が見られた。「道徳的な見方・考え方」を生かし、創造的な体験活動としてのドラマに取り組むことは「主体的・対話的で深い学び」

を実現するきっかけになる可能性がある。しかし、演じているときや見ているときに笑ってしまう生徒、ふざけた演出をする生徒がいたことも事実である。発達段階に応じて、ガイダンスの充実等の適切な指導をしていくことが必要である。

５．今後の可能性

①生徒の心情読み取りの能力が向上する可能性

ドラマを通して、当事者意識をもつという体験を繰り返し行うことで、教材を読むだけで、様々な視点から登場人物の心情を読み取ることができるようになる可能性がある。継続してドラマを実施することは、道徳科だけでなく様々な教科に生かせる資質・能力の育成につながることが期待される。

②アドリブを取り入れることによるドラマの質向上の可能性

生徒らが自分たちでセリフを加えることで、教材通りのセリフだけでは伝わりきらない細かな心情等が表現できるようになる可能性がある。生徒がその役になりきって出てきたアドリブであれば、生徒自身がより当事者意識をもって演じているということにつながる。しかし、グループによっては教材の内容を大きく逸脱したアドリブを加える可能性があることには注意しておく必要がある。

６．今後の課題

本実践を通して、一つの道徳的価値について考えることを児童生徒に事前に提示することは彼らの考えや視野を狭めたり、価値の押し付けになったりしないのかという問いが生じた。確かに、教科として道徳を扱う以上、ねらいとして設定されている内容項目について授業を展開する必要がある。しかし、今回のような様々な内容項目に気付くことが可能である教材を扱うとき、事前にねらいを提示しなければ、児童生徒はドラマを通して様々な価値に気付き、表現しようとする。それは、彼らの学びが深まり、広がる可能性もあれば、価値が拡散し、まとまらない可能性があることを意味する。今後、児童生徒の実態を踏まえた道徳教育の要としての道徳科の実践がますます重要になってくるのではないだろうか。

７．引用・参考文献

岡田芳廣、矢野雄大（2019）「『特別の教科　道徳』におけるドラマと反転学習を取り入れた『主体的・対話的で深い学び』」日本道徳教育学会発表資料

鈴木雅之（2011）「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響－テスト観・動機づけ・学習方略に着目して－」教育心理学研究 59、131-143

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）」

文部科学省（2017）「【道徳編】中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説」

文部科学省（2012）「中学校道徳読み物資料集」

道徳科学習指導案

1　**主題名**　　感謝【B-(6)】
2　**教材名**　　帰郷（文部科学省「中学校道徳読み物資料集」平成24年）
3　**ねらい**　　多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに気づき、それに感謝し、応えようとする心情を育てる
4　**前時での指導**　　教材「帰郷」・ドラマの台本・ルーブリックを事前に配付し、以下のような指示を与える

・「帰郷」という作品を扱うこと
・4人で1グループを作り、指定した場面に登場する4人の配役を決め、演じること
・演技はドラマ形式で実施すること。それぞれの登場人物の置かれている状況や心情などを考え、表現するようにすること。そのためにもそれぞれが十分に教材を読み込み、班で話し合いながら演技の練習をしてくること
・ルーブリックを用いて、演技〔台詞・表情・演出〕を評価すること

5　**本時の展開**

	学習内容（○）学習活動（・）	指導上の留意点
導入	○ドラマの準備 ・会場設営を行う。 ・教材の内容を確認する。	◇筆記用具をもって移動するように指示する。
展開	○ドラマ ・班ごとに演技する。 ○ドラマを通した気づきの共有 ・演じた生徒：それぞれの演技に、登場人物のどのような気持ちを演じたか発表する。 ・見ていた生徒：演技を見て感じたことや考えたことなどを発表する。 ○中心発問について議論	◇演技を聞くように指示をする。 ◇意見を広げたり、深めたりするように心掛ける。 ◇生徒のそばに寄り添うなど、生徒が発言しやすく接したり、生徒の心を開いたりするような聞き方をする。
	帰りの電車の中で研一はどんなこと考えていただろうか	
	・個人で考える。 ・自分の意見をもとに演技班で話し合い、意見を練り上げる。 ・クラス全体で共有する。	◇書くことが苦手な生徒の思考を整理し、意見をまとめるよう配慮する。 ◇机間指導で生徒の意見を把握する。
終末	○リフレクション ・学習をとして考えたこと、感じたこと、望むことについて内省する。 ・自己評価表を記入する。	◇価値を押し付けないようにする。